

ことばで生活は切り開かれたか

—— 学校設定科目「私達が立っている場所」十年の検証 ——

小山 秀 樹

一 はじめに

国語科の学校設定科目として「私達が立っている場所」を展開して十年になる。総合学科三年生の現代文選択授業として平成十二年に開講した。私達の社会がどうなっているかを知り、その中を生き抜くことばを獲得する授業を願ってこの科目名となった。私はかねてから、ことばの学習が日常生活に生かされるような、また日常生活からことばの課題が発見され、学習として取り上げられるような、そんな授業をめざしてきた。「私達」の授業では、本校最高の思考水準で授業と日常をつなぐことをこころがけた。本稿では、授業の実際をあらかた述べていきながら、過去の全受講生に対して実施したアンケート結果や受講した卒業生を招いての特別授業などから十年の学びを検証し、今後の授業につなげたい。

二 「私達」の授業、指導の実際

「私達」の授業は、「学ぶこと、考えること、感じること」「私達とこの現代社会」「しくみの中をことばで生きる」「私達が立っている場所とつくっていく場所」など、年間を四つの単元で構成する。授業はまず、力のある教材を使って自分達の日常生活を見つめなおすところから始める。そして年間二回のグループ発表、討論会の開催、中学生や保護者向け体験授業の実施、大学教授など外部講師による授業など、授業を日常のことばとつなぐ展開へとつなげる。(京都教育大学植山俊宏教授には、この授業を見守り続けていただいた。)使用教材、学習段階とその実際を表にするとおおよそ次のようになる。

	学習段階	学習の実際
1	力ある教材を使って日常を見つめ直す。	*「『である』ことと『する』こと」(丸山真男)：日常の問題をことばにする絶好の教材である。授業は意見交換の機会をいつ、ど

3	2	<p>(授業の側から現実へ向かう意欲とことばの力をつける。)</p>
<p>現実の課題意</p>	<p>教材による学習から発展的な現実の課題とつながった学習へ (授業の側から日常を見つめる)</p>	<p>のようにつくるかが重要である。話し合いで、人の意見に触れ自分の意見を相対化することは、問題を教材から離陸させ、現実の問題とさせる。</p> <p>*「文学のふるさと」(坂口安吾)：生きている現実がやむをえない形をしていて、自分もまた例外ではないこと、そしてそのことが生きる勇気になることは高校生の現実へのエールとなる。</p> <p>*「パニック」(開高健)：個としての人間と集団のなかの人間、全体と部分など、矛盾のなかを生きるテーマは高校生を引きつける。「構造図」を作成させ、読みとる力も鍛える。</p> <p>*「服装自主規制」問題、「下校時刻」問題の考察：アンケートなどの実施。小冊子の発行。授業主催の討論会の実施。</p> <p>*「国語表現」「倫理」「現代社会」などの科目への学びの広がり：小論文を書くときの課題認識の方法と意見、社会科学系の科目へのリンクなど、「私達」の授業の学びを他の教科学習の学びと総合させる。</p> <p>*オープンスクールでの体験授業の実施：「私達」の学びを授業者として中学生・保護者へ「世界がもし100人の村だったら」を考察する。「激突！プレゼンテーション大会決勝戦」「必勝！合格マニユアルづくり」</p> <p>*「生きるとは？」討論会：養護教諭も参加</p>

<p>識を授業にのせる (日常の側から授業を構想する)</p>	<p>して実施した、少女売春をあつかった討論会。(立命館大学 馬路英和先生との連携)</p> <p>*さまざまなマニユアルづくり：「今高授業マニユアル」「水球部マネージャー完全マニユアル」など、日常の見つめなおし、確認、改善のためのマニユアルづくり</p> <p>*本校教頭による授業：「ニールチェとの対話」「言葉に執って生きた人々」。</p> <p>*外部講師による授業：「文学に遊ぶ、文学に学ぶ」―短歌をめぐる―(京都教育大学 植山俊宏教授)</p> <p>*「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎)：作品の課題、日常生活の課題を総合しての文章づくり、討論会。</p> <p>*ハーバードへ留学する！：サンデル先生の白熱授業を見る。カントの講義を丸山真男と重ねる。「サンデル教授@東大」を語る。 (授業を受ける態度、発言のようすなどがたいへん刺激になる。)</p>
-------------------------------------	---

授業は段階を踏むことをこころがけたが、ままならないことも多かった。日常の課題意識を授業に乗せることによって、学習者は学ぶ意味を再確認する。学習の姿勢をつくり、議論を深めるために、段階は必然的に行ったり来たりする。

発表の前日にグループの議論が沸騰し、当日資料を全面的に改訂する局面。帰った班員を班長が呼び戻したこと。下校時刻後、校門前で立ったままの打ち合わせ。「私達」の授業の指導の特質は、

それらの場面に寄り添い、助言を加えてひとつひとつをかけがえのない場面にすることにある。

三 「私達」の十年を検証Ⅰ（アンケート結果から）

卒業後受講者は、日常生活をことばでしっかりとつかんでいるだろうか。少しでも「私達」の授業は生活に生きているだろうか。またひとりひとりとは、どのような力をつけているだろうか。そのことを確かめるには、卒業生からの声を聞くことが必要である。「私達」は、三年生現代文のひとつの選択科目（学校設定科目）に過ぎない。その受講者全員に向けて授業の感想、その後の学びを聞くのはいささか大げさだったかもしれない。しかし、現代文の学習が日常生活に生きる「ことば」を鍛える学習である限り、その学びの成果は、受講者のなかに確かな「ことば」として生成、蓄積されなければならぬ。その「ことば」のひとつひとつを受講生から聞き、知ることができれば、これからの授業を確信して進めることができる。遠い将来に生きると信じて展開した授業に、また今後展開される授業にそんなかけがえのない「ことば」を与えたい。私はそんな気持ちから、十年間の受講者二百四十二名にアンケートを送った。そして、五十五名より回答を得た（資料①）。数値の集計と自由記述から受講者の回答を見ていくことで「私達」の十年を検証してみたい。

(1) どんな授業だったか

a この授業で私は、「考える」という事にとつともなく満たされていた。い

や、むしろまだまだ知りたいという欲求に駆られたのである。満たされない思いを抱えたまま、大学で偶然であったのが哲学であった。

テキストを読み解くということ

限りある時間の中で、他者の意見を取り入れ考え抜くということ

自分の考えを発表するということ

何気ない言葉は人にとって大きな誤解を招くということ

言葉による定義や制限と戦わなければならないということ

すべての点が線になった気がした。

b 「私達が立っている場所」を受講して、投げ出したくなるのが正直何度もありました。筆者の言いたい事や考えている事を、何度読み返してもなかなか理解できなかつたり、イメージとしては浮かんでも、うまく言葉にしてグループのメンバーに伝えられなかつたり。何度も何度も、諦めたくなりました。でも、逃げませんでした。ここで逃げたら、この先逃げ続けることになると思ってしまったからです。どこにいても「言葉」というものが絶対についてくる。言葉から逃げるというのは人と向き合うことから逃げるのと同じなんじゃないかと思いました。だから「今もこの先も逃げない」と、この授業を受講した時に心に誓ったんです。

c 「私達」は一言で言えば、よく考える授業であったと思います。後にも先にも、『これでもか』と考えた授業はこれが初めてと言っても過言ではない気がします。卒業後、このような授業があったという話は他の人からは聞かないので、自分は恵まれた環境にいたと感じました。卒業後、人と議論をする際は、相手の話をじっくりと聞き、その考えを理解したうえで、ズレが生じないよう、自分の考えを話すようになりました。また自分の考えも、発言する前に相手に伝わりやすいかどうか考えるようになりました。『思考する』こ

とが、この授業で一番身についたことだと感じています。

d この授業の売りの一つはディスカッションですが、日常生活では、こうした知的な意見の衝突なんてめったにありません。普段考えもしない他人の意見を聞けるいい機会です。その中で友達だつて見つかるでしょう。交友関係は、高校時代はもちろんですが、その後にとっても貴重なものです。大学時代の交友関係は、「狭く深く」だと思いますから、「広く浅く」交友関係は高校生の特権ではないでしょうか。

e 私は国語系の教科が自分で得意だと思っていました。高校に入っても現代文のテストの点数は悪くなく、「私達の立っている場所」には力だめしというか、少し上目線で参加しようと思えました。しかしそこでは鼻づ柱を砕かれました。文章から意味を正確に拾いあげること、そこから自分の中で理解していく作業、本当に苦手でした。今まで表面だけをさらってわかった気になりました。

f 話し合いでうまく意見の伝えられないもどかしさ、限られた時間での活動、Q & Aの恐怖や、発表の緊張……。大変なことたくさんありましたが、すごく達成感がありました。あれだけ必死にグループで学習する授業は、ないと思います。受験のためだけにした勉強は、正直ほろぼろと忘れていつています。でも私達の授業で学んだことは、些細なことまで覚えています。これって、すごく大切なことなんじゃないかなと思います。

(2) どんな態度・姿勢・考え方が身についたか

g 私は今宮周辺でホームレスを見てきて、貧困に関心を持ちました。だから産業社会学部に入學し、貧困や格差について学んでいます。大学で学んでいるとたまに小山先生の「勉強にすぎなし」と「学ぶことに何のためらい

があるのか？」という言葉を思い出し、後押しされています。私は自分が関心を持った貧困問題についてもっと学んでいきたいと思いました。そして、少しでも貧困で困っている人たちの手助けになればと思います。

h まず、なによりもレジュメの作り方、プレゼンの仕方をつけることができました。大学でも発表の機会は多々ありますが、レジュメを作るとき根本は今でも高校の時とほぼ同じです。そして同じ班で発表をした人とは目指した大学が同じだったこともあり、最終的には違う大学になりましたが今でも仲良くやっています。そのような人と会うと話題になるのが「私達」のことです。

i 「私達」で扱った題材に関連する今の自分の専門などが話題となり、「あの授業もみんなを作る一部となっているんだな」と感じます。もちろん、あまりうまくいかない班のときもありました。班のメンバーの理解の到達度が違うなど苦労もありましたが、それを乗り越えることで集団での学習を学ぶことができました。

j 具体的に年間を通して色々なテーマがあり学んだと思うのですが、私は「自分で考え、言葉にする力」を学んだと思っています。私は高校卒業後、大学で美学美術史を学びましたが、卒業後は営業事務、現在は建材メーカーの総務経理部で働いています。結局（表面的には）文系でもなく、学んだ分野からは程遠い仕事をしていますがどんな仕事をしていても生きている限り「自分で考え、言葉にする力」は重要であると感じます。ただ毎日過ごしているだけでも悩みや考えること、迷う事は尽きないですが、そのような時に表面的な事柄にまどわされず、その時の自分に精一杯の答えを出せるよう、考える力の土台をこの授業で学んだように思っています。

k 私は日本語日本文学の2回生です。日文は、日本文学の研究が主で、ど

れだけ考えられるか、調べられるかが問われそれを発表しなければいけない。

1 回生の時から強いられます。グループ発表のリーダーになって、仕切つていくことに戸惑いがあつても、やるべきことは分かつていました。スケジュールの把握、逆算して日にちの計算、やらなければいけないことを書き出し、割り振る。いついつまでにこれをやってきて、集まったときに成果を見せ合う。みんなと一緒になんてできないのを「私達」で本能的に知つた、得たと思う。だから大学でこういうことをしていても、みんなにやってきてもらうこと、集まつてやること、を分けられる。とにかく「であることとすること」でリーダーをやつたのはかかつた。すごく糧になつた。

1 文章の内容を他人に説明できるまで理解するには相当深く読まなければいけない。その為、物事に対する考え方が深くなり、完璧主義の傾向が強くなつた。考え方もパズルのようにひとつひとつ順序立てて考えることが多くなつた。

m 文章の「完璧な理解」のように、「完璧な理想」を思い描けるようになった。目標を立てる時も理想から出発できるようになつた。

n 人と長時間話（議論）をすることができるようになつた。また自分の意見を明確にして話ができるようになった。

o 話が長くなつた。ファミレスに長く居られるようになった。

p 「私たち」での学びは、そのまま大学での学びで通用しました。演習はもちろん、他大学の生徒と自主ゼミを作って語り明かした時でもいつも脳裏には「私達」での激しい討論がありました。もちろん学問だけでなく、サークル等の人間関係においても「私達」は出てきます。まず何事も「真剣」に考え、取り組むことができるのです。「私達」では抽象的な事柄を多く学びましたが、それが現実と関係ないかというとはなく私の「考え方」の支

えとなつていたので人間関係で迷つた時も偽りなく人とぶつかり合つて接することができました。

q 大学時代、グループ討論の授業や就職活動の時のディスカッションなどで自分の意見を発表すると同時に、他人の意見を聞く力、全体の意見をまとめる力がついていたように思う。

・ひとつの事柄をいろんな角度から見ることができるようになつた。

・他の人の話をより深く理解しようとするようになった。

・自分の意見と相手の意見を客観視して頭の中でいろんな見方を立体的に組み立てれる気がします。

・本を読む時、1回じゃなく何度も読むことで新たな発見があることを学べたので、気になる部分は二度読むようにしています。そうすると、気がつかなくなつた発見があるので、私たちをとつて良かったと思うことがあります。

r 大学に入つてから「知っている事とできる事は違う」とよく人に言われるようになりました。「私達」はまさに知ることとできる事に転換する事だつたんじゃないかと思ひ返して思い出しました。「知る事」で満足していた私にとって私達は自分の考えに革命を起こすチャンスだつたと思います。実際、私が真剣に授業と向き合えたのかと言うと疑問です。そのため今だに知ることとできるの違いに苦しんでいます。「私達」で得た事のひとつに人とのディスカッション力があると思います。とにかく人に自分の考えを伝えるために口頭だけでなく文字や記号、図にしたり、出来得る事をしまくり伝えるという作業をしました。またそんな状況だから、人の話を聞くことにかけてもかなり鍛えられたと思います。大学のゼミや就職活動でもこのスキルはとても役立ちました。

(3) ことばで生きるということ

s この授業を受けたことは、今の自分に極めて影響しているように思えません。本を読むことで得られるものというよりも、もっと人というものがわかっただような気がします。同じ作品を読んでいるのに人によって捉え方が様々で、同じ人間なのに違う。改めて、強く感じました。この授業は、生半可では通用しないくらい内容が高度で充実していました。もちろん、小山先生も魅力的で恵まれていました。けれど、自分の一年間の記憶が表面的にしかとめていなかっただけで、やはり、この授業はやる気が凄くある人が対象であるのに、結果、自分は単位が取れればいいに終始していました。そうであるのに、得たものが非常に大きく、まさに今の自分ができあがり、視野が広がり、いろいろな考えができるようになりました。しかし、その反面、悩みがさつと解決できなくなり、本当に悩むことが苦しくなったりします。これはこれで、よく言えば、今の自分における特権なのかなとも思います。これを機に、どんどん成長していきたいと思いい、そして、どんな真実も受け入れられる強さを手にいれて、これから先、よく物事を判断して悔いのない人生を送りたいと思います。

t 「本当にそうなのか？」の思考を、もはや意識的ではなく、日常的に行うようになったこと、これは私の中で「私達」が生きていることの何よりの証拠であると、日々感じている。

u 私は今、法学部ですが、法律が作られた目的などで民主主義の考え方があげられることがとても多いです。例えば、「権利の上に眠るものは保護に値しない」という言葉は民法を学ぶ上でよく使われます。これはこの言葉だけ聞いても意味はわかりますが、やはり丸山真男の「日本の思想」を読んだ上で聞くのとは理解の深さがかなり変わってくると思います。このように1つ

の事柄でもその根本となる考えを知っているかどうかで、新しく得た知識をどこまで自分のものとして理解できるかが大きく左右されます。「私達」はこの根本となる考えを扱い、また新たに知っていく機会を与えてくれたと思っています。

v 私は病気をして、二学期はほとんど授業を受けられませんでした。一番印象に残っているのは、とにかく、読んで書いて、読んで書いての繰り返しで大変ですけど、文章を読み込むことのおもしろさを知ったことです。授業中のことは申し訳ないのですがあまり思い出せなくて、ひたすら、書きまくって書きまくって考えた印象が強いです。受験にはもちろん役に立ちましたが、何より、日常で深く考えるクセがつかえました。ひとつのことをある一面から見ただけではなく、多角的に見ようとする事ができるようになりました。

w 自分自身、「私達」をとっていた現役のころは、ただただ授業を受けているだけだったが、卒業後、大学に進学してみると自分が周りとは多少違うことが分かった。僕はいつも自分の意見と、客観的な意見の両方を持って生活しています。それは至極当然なことだと思っていたのですが、実はそういうわけではなく、周りには客観的に物事を判断できる人間はなかなかいませんでした。正直びっくりしました。しかし今考えてみると、僕がこういう風に客観的に物事を判断できるということは「私達」の授業をとっていたからこそなのかなあって思いました。無意識的に客観的にみるというクセがこの授業でついたように思います。客観的なモノの見方ができるというのは、人間的にも社会に出るという面に関しても非常に大事なことだと思うので、とても感謝しております。

x 「私達」での学びの経験は、大学で度々訪れるその場面で、私を多弁にさせるより、むしろ寡黙にさせたように思う。もちろんそれは、考えることを

放棄したからではなく、むしろ「考えを尽くした上で言葉」の重さ、つまりその場の思いつきで浮かぶ言葉は軽く、それらはいくら集めたところでたいした重さにはならないが、考えに考え抜いた上での言葉は、たとえ一言でもずっしりと響くということを「私達」で身をもって学んだからである。実際、大学の授業における議論の中で、私が挫り出した、たった一言がその後の議論の方向やテーマを決定付けたときは、「考えること」の重要さを改めて思い知るとともに、「私達」でやっていたことが報われたようであつた。

▽授業の中で、ただ投げられたもののキャッチするだけでなく、自ら、投げるものの色や形を観察し、先生や仲間とキャッチボールをしながら学べたことでものごとには本質があることを体験することができました。

四 「私達」の十年を検証Ⅱ（特別授業から）

受講者へのアンケートに加えて、「私達」の十年特別授業として「私達」はこう考え、こう行動して生きています!!スペシャルを実施した。授業は、およそ次のような内容となった。（授業の一部始終は「大阪の教育力」向上プランに係る公開研究授業として今宮高校HP上で公開中。教員、保護者、一般、「私達」受講者などに向けて、広く感想や意見を求めた。）

- 1 はじめのことは
- 2 先輩方のお話

①MTさん（十期 二〇〇八年卒業）

グループ発表でリーダーを経験した。内容の吟味、スケジュールの

作成など、どれも初めての経験だったが成功体験となった。大学では、すべての研究発表でリーダーを務めた。苦労もあり、腹立たしいこともあったが、その苦労は生きる。仕事をすると、誰かがしなければならぬことがあつて、それを自分がしていると考えれば、そのことを楽しめる。

②MYさん（八期 二〇〇六年卒業）

学部は法学部だったが、法学は誰にとつても同じ答えを出さなければならぬ。大学教育への疑問から大学院では社会学を専攻。自分にとつては、「私達が立っている場所」を考えたことになった。「私達の授業は教材を読み込む力、グループ発表の方法での力の獲得に加えて、テクニカルな面で自身の力となっている。第一は、丸山真男、吉本隆明などの作品に触れたことが、大学の授業の先取りとなっている点。議論の大纲をつかめ、その議論の程度を判断できる。第二は、高校時代に腹を割って懸命に議論したという点。いつも一緒にいて、みんなと議論できるのは高校の特徴。作者との対話、小山先生への挑戦は財産。

③KAさん（四期 二〇〇二年卒業）

レベルの高い「私達」の授業は、大学の勉強にだけに生きるのではない。それは、自身の教養となる。みなさんは自分の存在をどれほど知っているか、自分自身をどれほど説明できるか。自分とは何かを（ミクシーのように）自分にレッテルを貼るような形で説明するのはおかしい。自分自身を自分のことばでとことん説明しようとする。その行為を通して言いあらわせたことばを持つ私があらわれる（私達化）。それは、レッテルではなく、深いところで自分を知ること。この授業を受けて自分が変わるだけでは不十分。この授業を受けて変わっ

た「私」が人生を変えなければならぬ。

④ SRさん(三期 二〇〇一年卒業)

開講の年、開講群の関係で現代文をとることができず、現代文の代わりにになると聞いて「私達」を受講。今宮時代、日常生活に車いすを必要とする友人がいて深く関わり合えたことが自分の基礎となっている。現在理学療法士をしている。患者さんが自宅へ帰ったあとどのような住宅に住むのか、改築や公共施設などで自分の経験や知識が役に立つのではないかと考えて今年から建築の専門学校に通っている。自分のやりたいことをやりたいようにすることが大切。今宮の出会いを大切にしたい。今宮の友人とは、現在でもよく話す。

3 現状報告く私たちが学んでいること

四月から七月までの学習内容を生徒が報告。

4 Question Time (在校生の質問に卒業生が答える)

質問1 MTさんは、「苦勞は生きる」という話をされ、SRさんは「やりたいことをやる」と話された。正反対のように思えるのだが、どう解釈したらいいか。

答え1 自分自身の中になんばらせるものがある。(MT)

がんばることを楽しんでいるのであればよい。(SR)

MTさんはいへんよく自分を分析できている。(KA)

質問2 みなさんは「私達」は、将来的に役に立つと話されていたが、受験の役に立つのか。

答え2 抽象的な内容を具体化することで役に立つ。(MT)

授業は文章を読み込むことが根底にあるので、現代文より役に立

つ。(MY)

合格すれば役に立つと考え、不合格ならば役に立たなかったと考える。あなたの質問の様子から、あなたはそう考えるのではないかと思う。(KA)

面接の時、いいたいことをまとめていうことに役立った。(SR)

質問3 私は芸術の方面に進もうと考えているが、今までの「私達」の勉強の中で「一流とは何か」とか納得いくものがあり、自分の中で霧が晴れたような感覚になった。みなさんの学習の中で、そのような経験を教えていただきたい。

答え3 谷川俊太郎「みみをすます」にこころ惹かれた。以降、いろいろと読んでいる。(SR)

パラダイムシフトの話(歴史としての科学)がこころに残っている。(MT)

質問4 自分の将来について考えるが、まだ見えてこない。KAさんは見える瞬間があると話されていたが、自分の周りの環境は常に変わっている。本当に見える瞬間はあるのか、またそれはどういうものか。

答え4 自分は大学に入って見えてきた。自分は福祉を勉強してきたが、現場で起こっていることは、自分の福祉観とはかけ離れていた。そのとき、自分について深く考えた。現在は、家業を継いでいる。出した答えに自信を持つ、自分自身を信頼すること、今の自分とこれからの自分を結ぶことを考えて自分は生きてきた。(KA)

5 閉会のことば

四 ことばを鍛える、ことばで つなぐ。

「私達の十年」検証のアンケート結果から感じられるのは、経験することの重み、そして若い学習者の学びのエネルギーである。当時の「私達」の授業に対しての彼らの学びの姿勢など、さほど重要ではない。長時間の話し合い、私や友人の発言、テキストを真っ黒にした書き込み。それらのひとつひとつの経験が、そのとき彼らがどのような態度であったかに関わりなく重層的に彼らの記憶に残り、振り返らせ、その都度彼らを学習させた。それは、今の自分よりもましになりたい、よくなりたいというエネルギーに導かれる。私が授業でこころがけなければならぬことは経験の種と一緒に播くこと、彼らの持つエネルギーに気づかせ、一度全開させることであった。多くの緊迫した、将来振り返ることのできる場面をつくり、ことばの活動に関わりたいいくつもの経験をさせる。そうすれば彼ら自身で花を開かせてくれる。そう確信する。

「歴史としての科学」が大学の講義で取り上げられた時、当時学んでいたグループの中で一人余裕で理解していた。講義自体のレベルも「私達」と比べると低いものだった。今思えば、教育の質は学校の種類に比例するものではない。高校教育の可能性って想像以上に明るく開けているものなんだって気づいた瞬間だった。なんか逆説的にね。後にそのことをダンス部の活動を通して確信しました。高校ってすごいところ。

現在日本代表としてアメリカ遠征までするようになったダンス部の草創期に関わった彼は、「深い経験は、生涯を通じて振り返られ、

学ばれる場面となる」ことに気づいている。

『私達…』の授業は思い出すので、このようにアンケートが送られてきて、とても嬉しく感じています。近頃は、忙しくてゆっくり物事を書いて考えることもなくなっていたので、なんだかハツとさせられたような気分です。そしてもっと勉強して、色々考えないとなあとも思いました。

学習者は、彼らの生活のリズムに応じて自然と気づき、ことばを獲得する行為を継続させる。それはゆつくりとしているが、誰にも等しく訪れる運動である。そして消費されるのではなく、大切に扱われることばが生まれ、そのことばによって学習者は生きる。今回のアンケートの検証は学習者ひとりひとりにある、ささやかであるが確かな運動を再確認することになった。

また特別授業は、受講した卒業生のなかに力強くどまっていることばが表現される絶好の機会となった。そこでのそれぞれのことばが、自身の、またそれを聞く者の人間的な成長に資するものであったという事実は、「私達」の十年にとって最も価値ある学びの検証となった。KAさんは、レッテルを貼るようなことば遣いから脱却して自分自身を説明できることばを持ち、社会と関係を持つことばを〈私達化〉ということばで表現した。今回、二十代後半を迎える人達も交えて授業を実施したことは、開講十年を経て初めて「私達」が「立っている場所」としてことばを鍛えあう場となり得たと言えるかもしれない。そしてその卒業生の確信あることばに触発されて現受講生達は、つたないながらも質問を發した。〈正反対のように思えますがどう解釈したらいいですか?〉〈受験に役立ちますか?〉〈私は霧が晴れたような瞬間を経験しましたが、先輩達はどのようにして

か?) (私は自分の将来についてまだ見えてませんが、本当に見える瞬間はありますか?) それらの質問がどれも現在の自分自身を分析した発言のあとにされたことは、注目に値する。それらは、現在の自分をことばにしようとしたある種の「もがき」のあとで発せられた懸命な質問である。そんな質問は必然としてどれも素朴な、真正面からの質問になるのである。若い学習者は生きる上で何か大切なこと、かけがえのないことに触れたとき、ほんとうのことを言いあらわすことばを探す。そしてそれはほとんどの場合、おずおずとした質問の形をとる。私は今までの指導の経験から、この質問を発した学習者が将来を切り開くことばをこころに蓄積したことを知るのである。

今回授業に参加させていただいて、再認識したことがあります。まずは「私達」という授業が生徒と卒業生をつないでいるということ。それと、知らないことを知る喜びが「私達」という授業にあるということ。あと、子ども以上大人未満の高校生は、熱せられた鉄のように熱く、何にでも形を変えることができる危うさと希望に満ちているということ、あるいは、そんな二年を過す存在だということです。

現在の受講生と卒業生の間に「私達」の授業が成り立つとすれば、「今、この場所から」学び、その学びを「今、この場所を」発せるといふかたちで「始めたこの授業は、より深化するに違いない。」

「私達が立っている場所」という授業の意味や自分に与えている影響の大きさにについて今改めて実感しています。本当に楽しかった。もつと話しかかった。何をしていても、思考したり、それをことばで表現したり、理解したりすることは必要です。ことばには大きな力があります。もつと伝える力をつけた

い。そんな事を感じた一時間でした。十年振りの懐かしさとともに。

卒業生の学びは、現在もつづいている。「私達」の授業の世代を越えた対話は、私に次の授業の構想を喚起し、その力に動かされながら私は授業をつくっていった。私は今後も、ことばの学習の指導を通して自分自身をつかみ、生活に生き、人や社会と関係をつくることばを獲得する運動を力強く継続させることに資したいと思う。

(大阪府立今宮高等学校)

【資料①】

「私達が立っている場所」受講者アンケート (55人を集計)

* 直接この用紙にお書き下さい。裏面も使っていただいて結構です。

1 選択した動機についてお聞きます。なぜこの科目を受講しましたか？

(複数回答可)

- 1 現代文の力をつけたかったから。 37
- 2 学校設定科目をとっておきたかったから。 8
- 3 グループ発表など授業の方法に魅力を感じて。 21
- 4 先輩や先生からのアドバイスがあったから。 7
- 5 担当者(小山)の授業をとりたかったから。 20
- 6 なんとなく。 9
- 7 その他 2

科目名が変わっていて気になったので／面白そうだった／このままじゃ人数少なくて開講出来ませんっていうプリントを読んで。そのプリントがおもしろかった。直感。こいつはヤバイ！とるべきだ！／「私達が立っている場所」は確か、私たちの期が最初だったと思います。／普通の現代文がおもしろくなさそうだったから。／何となく惹かれる題名で、友人も同じ授業を取ってみると、話していたので、現代文の力をつけたかったし選択してみました。／

2 よく学べた授業、印象に残っている授業は何ですか？番号に○を打ってください。() は作品のキーワードです。(複数回答可)

グループ発表

1 『』である『』と『』すること

丸山真男(制度の自己目的化・価値の蓄積)

46

2 歴史としての科学

村上陽一郎(パラダイム論・対自化・知的冒険)

講義授業

- 3 文学のふるさと 坂口安吾(救いが無いことが救い・大人の仕事) 11
- 4 君たちはどう生きるか 吉野源三郎(人間は水の分子・油揚事件) 19
- 5 パニック 開高健(ネズミの大移動・組織と人間) 17
- 6 バッタと鈴虫 川端康成(光の戯れ・恋愛の駆け引き) 2
- 7 安楽への全体主義 藤田省三(能動的ニヒリズム) 6
- 8 掟 F・カフカ(番人・掟はおまえだけのもの) 5
- 9 テクストについて 中島俊(人間はテクスト的存在) 6
- 10 コールドチェインとひそやかな意志 森崎和江(トマトが泣いている) 1

特別授業

- 11 ニーチェとの対話 芝田秀和先生(本校教頭) 2
- 12 言葉に執って生きた人々(本居宣長) 芝田秀和先生(本校教頭) 2
- 13 短歌創作・合評授業 植山俊宏先生(京都教育大学教授) 3
- オーブンスクール体験授業
- 14 今宮高校合格必勝マニュアルづくり 4
- 15 もし世界が100人の村だったら 1
- 受講者からの課題解決授業
- 16 服装自主規制・下校時間を考える(グループ研究) 2
- 17 パネルディスカッション「生きるとは？」 2
- 18 その他 2

宮本輝の作品だったと思います／10年前で、記憶が乏しいですが…。誰の何と

いう著書かはわからないですが・バラタイム転換の話・発表（当時は個人の発表ではありませんでしたか？）・小山先生自作の映画／グループ発表の際に早朝に集まったこと。／

3 授業の学びについてお聞きします。「私達が立っている場所」では、どのような学びがありましたか？あてはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

- 1 教材を読み込む力がついた。 37
 - 2 現代文の力がつき、受験に役立った。 14
 - 3 グループで話し合うことにより、仲間と学び合うことができた。 28
 - 4 発表やプレゼンテーションの能力を身につけることができた。 26
 - 5 必要な事柄を資料としてまとめる力を身につけることができた。 22
 - 6 時間がない状況で協力して学習する力を身につけることができた。 20
 - 7 課題を取り上げ、解決する道筋を考えていくことができるようになった。 22
 - 8 現代社会に対する問題意識を持つことができた。 20
 - 9 期待したほど学べなかった。 0
 - 10 その他 6
- 自由記述欄
- 1…一生懸命自分の中できみくだいた。国語得意やったのに、あんなに苦労させられた文章は初めてやったかも知れません。3〜7…であることとすること、6番目のお楽しみ班になって、テーマ決めから難航。全体のまとめをすることにしたけど、中途半端は嫌だし、かなり高いものを目指した。他の班は自分の担当箇所だけやけど、私たちは全体を読み込んで作った！（という自

負）／ここでリーダーをやったんが、大学でリアルに生きてる。特にスケジュールをたてること。発表がいつならレジュメはいついつまで、話原稿はいついつまで、実質1日あって、いつ集まれて、みたいなことができるようになった。9…そんなはずはないー／理論的な思考力、民主主義の本質的な意味、等。丸山真男の著作の精読からはもちろん、民主主義に関して（＝市民としての意識をもつことに関して）を、学ぶことが出来ました。他に特筆すべき学びとして、村上陽一郎の著作から、私たちの信仰している「真理」（と呼ばれているものの）あいまいさ等がありました。／言葉1つを大切にあんなに時間をかけて考える（思い悩む…）初めての経験となる授業でした。／評論文を興味を持って読めるようになりました。／もの見方を学ぶことができました。／精読していく力がついたと思います。／人に伝わるような表現をすることの難しさを知ることが出来ました。／本を読み、問題を解いていく現代文の授業だけでなく、3〜6も本当に学べてよかった。／「切磋琢磨」というものを肌で感じる事ができました。

4 「私達が立っている場所」の授業が、卒業後から現在までの間、生きたと感じたことはありませんか？

（学習内容・発表の仕方など、どのようなことでもけっこうです。）

- 1 あった 44
- 2 なかった 6
- 3 4であったと答えた人にお聞きします。それは、どのような場面で生きたでしょうか？（複数回答可）
- 1 大学や専門学校の勉強 28

2	職業生活	5
3	毎日の生活	24
4	友人との会話	17
5	その他	6

自由記述欄

何かの場面で、「授業」が生きたと感じるというよりも、高校時代を思い返した時に今の自分の土台になっているんじゃないかなと感じています。／深く考えるくせがついた／「今」この瞬間／4：私たちネタで盛り上がった。5：ふとした瞬間。授業を受けていて、読んでいて、回路がつながる瞬間ってありませんか？／自分の意見や研究など、発表して聞いてもらうことが楽しいと感じるようになった最初の導入だっように感じます。／5：高校時代の仲間との思い出話。友人をはじめ、大学の教授との会話でも筋道をたて、論理的に話せるようになったと思います。／4：自分の意見と相手の意見を客観視して頭の中でいろんな見方を立体的に組み立てれる気がします。5：本を読むとき一回じゃなく何度も読むことで、新たな発見があることを学べたので、気になる部分は二度読むようにしています。そうすると、気がつかなかった発見があるので、私たちをとって良かったと思うことがあります。／上の学校にあがると、長文をまとめ、発表したり、レポートを書いたりする事が増えるので、難しい文章を読んで、理解し、スピード良くまとめる時に、役に立ちました。／「である」「ことと」「すること」（丸山真男）の授業は人間の価値について考えるときに役に立つ。

6 「私達が立っている場所」の授業の学びがどのように卒業後に生きたか、具体的に教えていただければと思います。

（自由にお書きください。長さには制限はありません。メール等で送っていただいても結構です。些細なこと、個人的なこと、どんなことでも結構です。書かれた内容の秘密は厳守します。安心してお書きください。）

7 授業や今宮高校の思い出、アドバイスなど、今宮高校で学ぶ後輩達へメッセージをお願いします。
 ありがとうございます。この用紙をご返送下さい。

「6・7のアンケートについては、回答者全員が丁寧に詳細な記述を送ってくれました。本文でその抜粋を紹介しています。」